

《論文》

キッズアスレティックスインストラクター 資格認定講習会における成果の検証

田中 悠士郎, 黒岩 純, 黒沢 果菜, 小林 敬和

The investigation of the result of a Kids Athletics instructor certification's seminar

Yujiro TANAKA, Jun KUROIWA, Kana KUROSAWA, Hirokazu KOBAYASHI

キーワード：コーチ教育, キッズアスレックス, アンケート調査

Keywords: Coaches Education, Kids Athletics, Questionnaire survey

要旨

本研究は、日本キッズアスレックス協会で行ってきたインストラクター資格講習会の成果について検証するため、講習会後に実施しているアンケート調査の結果について、量的及び質的分析を行った。調査項目の「自己の満足度」・「自己の理解度」・「内容の難易度」において、受講生からの高い評価が伺えた。また、自由記述の質的分析から、『理解の向上』、『意欲の向上』、『気づき・発見』、『満足感』、『意見要望』というカテゴリーが得られた。これらのことから、インストラクター資格講習会のプログラムは、講義プログラムと実技プログラムの組み合わせから、深い学びになるよう考慮されていることが推測された。一方で、実技プログラムにおいて、より実践的な学びに関連づけることや、講義プログラムでは実技プログラムとの関連性を高めることや振り返りを多く取り入れて受講生の理解を高めることなど、改善の余地があると示唆された。

はじめに

本研究は、日本キッズアスレックス協会が行っている「キッズアスレックスインストラクター資格認定講習会（以下、インストラクター講習会）」の成果について検証を試みる。これまで、日本キッズアスレックス協会では、インストラクター講習会を実施する際に、

担当講師の指導内容や方法について振り返る為や講習会の満足度や需要を図る上でアンケート調査を実施してきた。しかし、得られた結果は、それらを確認するための一資料に留まっており、そのデータを分析し、講習会の成果を評価し、プログラム内容の充実や教授法の向上を図る為の検証までは至っていない⁴⁾。講習会の成果を検証することや講習会でのプログラム内容の充

実を図ることは、今後、スポーツ価値を理解し、スポーツの発展に必要な指導者の養成を行う上で極めて重要な事と考えられる。

1) 日本キッズアスレティックス協会について

日本キッズアスレティックス協会は、国際陸上競技連盟 (IAAF) より、日本における IAAF Kids Athletics の普及の団体として2012年に設立された協会である。そもそもキッズアスレティックス (IAAF Kids Athletics) とは、IAAFが全世界の国や地域で実施している走・跳・投のゲーム性をもった、子どもの為の運動プログラムのことを指し、IAAFのコーチ教育認証システム (IAAF Coaches Education and Certification System:以下 IAAF CECS) における安全を考慮した運動教材として用いられている¹⁾。

日本キッズアスレティックス協会は、キッズアスレティックスを日本国内で普及することや IAAF CECSに準拠したインストラクター養成を行うこと、そしてアジアを中心としたキッズアスレティックスに関わる国際機関と連携をすることなどが主な活動である²⁾。それらの活動の中でも、インストラクターを養成するインストラクター資格認定講習会については、主に国内の大学や専門学校などを中心にこれまで60回開催しており⁵⁾、協会認定の「キッズアスレティックスインストラクター」有資格者は、800人を越える (2017年11月現在)。

2) インストラクター資格認定講習会について

日本キッズアスレティックス協会が実施するインストラクター資格認定講習会は、18歳以上で走・跳・投の基本的な体力水準を有するスポーツ愛好者を受講資格としている。

また、このインストラクター資格認定講習会は、ステージ1 (S1) 及びステージ2 (S2) の2段階で構成される。S1は、「キッズアスレティックスとは」、「コーチング理論」、「発育発達とキッズコーチング」、コーチングに関するグループワーク及びプレゼンテーションといった講義プログラムと走・跳・投の基礎的な運動を取り扱う実技プログラムによる演習及び筆記試験が行われる。一方、S2では、キッズアスレティックスの代表的な種目を教材として扱い、各種目の紹介とその指導方法を実技による演習として行い、実際に受講生が指導し受講生からフィードバックや講師から評価を受ける指導実習、筆記試験から構成される。受講者はS1及びS2の修了により、協会認定資格「インストラクター」が付与される (図1)。なお、インストラクター講習会における講師は、IAAF公認講師 (L1L) もしくは、IAAFレベル1コーチ (L1C) かつ、講師研修の修了者が担当する。

3) これまでのインストラクター講習会におけるアンケート調査とその評価について

日本キッズアスレティックス協会では、これまでインストラクター講習会において、講習会の内容充実を図る為、また講師が受講生の声を確認し、教授法について振り返りを行う為にS1の受講生に対して任意のアンケート調査を実施してきた。しかし、前述したように、得られた結果は、それらを確認するための一資料に留まっており、データを分析し、講習会の評価や充実を図る為の検証までには至っていない。これまで開催された講習会について客観的な視点で評価を行い、更なる講習会の充実を図ることは重要な事と考えられる。



日本キッズアスレティックス協会ホームページより引用
<http://www.kidsathletics-japan.org/seminar/>（2017年11月）

図1. 日本キッズアスレティックス協会インストラクター資格のシステム

目的

そこで、本研究では、日本キッズアスレティックス協会のインストラクター資格認定講習会において講習会後に実施した受講生に対するアンケート調査について、統計的な分析や質的分析を用いて講習会の成果について検証を行うこととした。

方法

1) 対象者

2015年1月から2015年7月までに開催されたインストラクター講習会（S1）に参加した109名とした。今回の対象者は、全て大学生であった。なお、参加者の属性（性別・専門種目・指導経験の有無など）については、本研究の分析対象からは除外した。

2) アンケート調査の実施方法及び項目

インストラクター講習会のS1に参加をした受講生に対して、講習会終了時にプログラム内容について、それぞれ「自己の満足度」・「内容の難易度」・「自己の理解度」と「講習会全体の感想」についてアンケート調査を実施した。アンケートでは、それぞれのプログラムに対して三件法を用い、講習会全体の感想については、自由記述による調査を実施した。そして、アンケート用紙は、記入後すぐに回収を行った。なお、講習会の実施プログラムと三件法による評価の基準については、表1及び表2に示す通りである。

3) 分析方法

今回、全ての項目に対して回答していないデータについては、分析の対象から除外した。まず、各プログラムにおける「自己の満足度」・「内容の難易度」・「自己の理解度」につい

表1. 実施プログラム（アンケート評価の項目）

プログラム名(項目名)
1. キッズアスレティックスとは(KAガイダンス)
2. コーチング論(講義①)
3. 安全指導(講義②)
4. 発育発達論(講義③)
5. バランス運動(実技①)
6. リズム運動(実技②)
7. タイミング運動(実技③)
8. スキッピング(実技④)
9. バウンディング(実技⑤)
10. パワーポジション(実技⑥)
11. 筆記試験(択一問題)
12. 講習会全体を通して(総合評価)

表2. アンケート調査項目別の三件法による評価の基準

評価項目	評価基準
「自己の満足度」	1. 不満足 2. 普通 3. 満足
「内容の難易度」	1. 易しい 2. 普通 3. 難しい
「自己の理解度」	1. 不十分 2. 普通 3. 十分

て、三件法によって得られたデータを算出した。さらに、三件法で得られたデータから統計的処理を行うために、「自己の満足度」について『満足』と『それ以外（普通と不満足）』に、「内容の難易度」について、『普通』と『それ以外（易しいと難しい）』に、そして「自己の理解度」は、『十分』と『それ以外（普通と不十分）』の二項目に変化した。なお、変換したデータは有意水準を5%未満とし、二項検定による差の検定を行った。

一方、自由記述で得られたテキストデータについては、北村ら（2005）や黒岩ら（2017）の方法を参考に一つの意味をなす意味単位に分け、単純化した。そして、類似したデータを集

め、適確に表す表現に置き換えてカテゴリー化し、質的分析を行った。なお、信頼性を確保するために複数の研究者でカテゴリー化の妥当性について議論を行った。

4) 倫理的配慮

アンケート調査で得たデータは、日本キッズアスレティックス協会事務局で保管されている。本研究にける資料としての使用について、研究の趣旨、個人情報の保護に配慮する由を説明した上で、日本キッズアスレティックス協会にデータ使用について同意を得た。なお、データ利用については、本研究での使用に限定し、厳重に保管している。

結果

1) 各プログラムにおける「自己の満足度」・

「内容の難易度」・「自己の理解度」の結果

以下にアンケート評価の項目（主にプログラム名）に【 】を用い、三件法による評価の基準には、『 』を用いて説明する。

まず、個々のプログラムにおける「自己の満足度」における集計結果を図2に示す。

【講習会全体】としては、『満足』が72.5%と多かった。それぞれのプログラムについては、【筆記試験】を除き『満足』の割合が一番多い傾向であり、続いて『普通』、『不満足』の順であった。なお、【筆記試験】においては、『普通』と答えた割合が多く、次に『満足』、『不満足』であった。

次に、「内容の難易度」について、結果を図

3に示す。【講習会全体】の評価は、『普通』の割合が72.5%と多く、次に『易しい』、『難しい』の順であった。実技のプログラムでは、『普通』や『易しい』の割合が多く、『難しい』がやや少ない割合であった。また、講義のプログラムと【KAガイダンス】においては、実技プログラムと同様に『普通』が一番多く、それ以外の選択項目については、【発育発達】と【筆記試験】を除いて『易しい』、『難しい』の順であった。

そして、「自己の理解度」については、結果について図4に示す。【講習会全体】では、『十分』が54.1%と割合が最も多く、次に『普通』、『不十分』の順であった。プログラムごとの評価では、実技プログラムと【KAガイダンス】について、『十分』が多く、次に『普通』であり、『不十分』はごく僅かであった。また、講

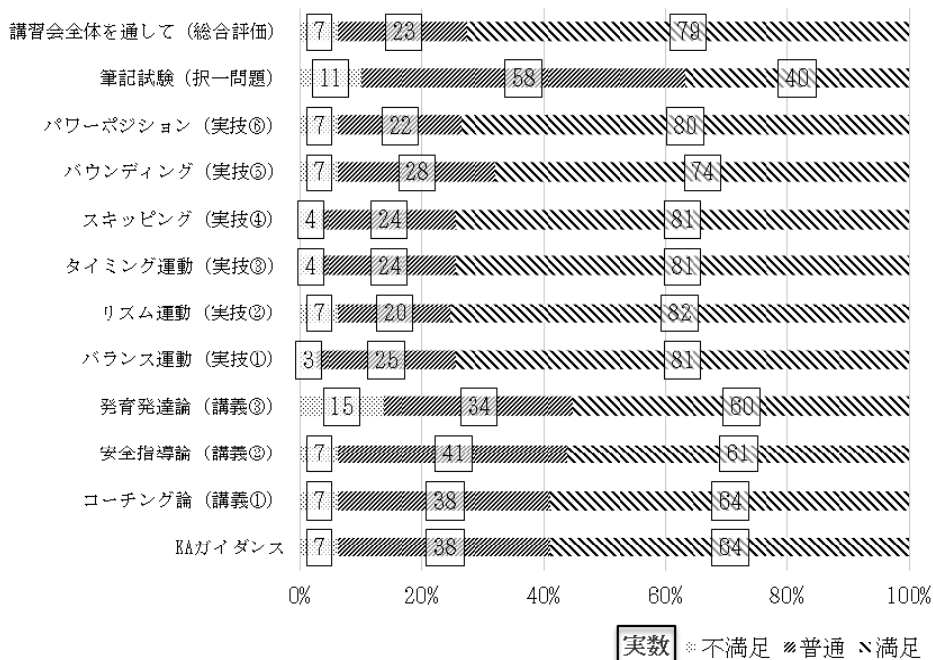


図2. 「自己の満足度」におけるアンケートの集計結果

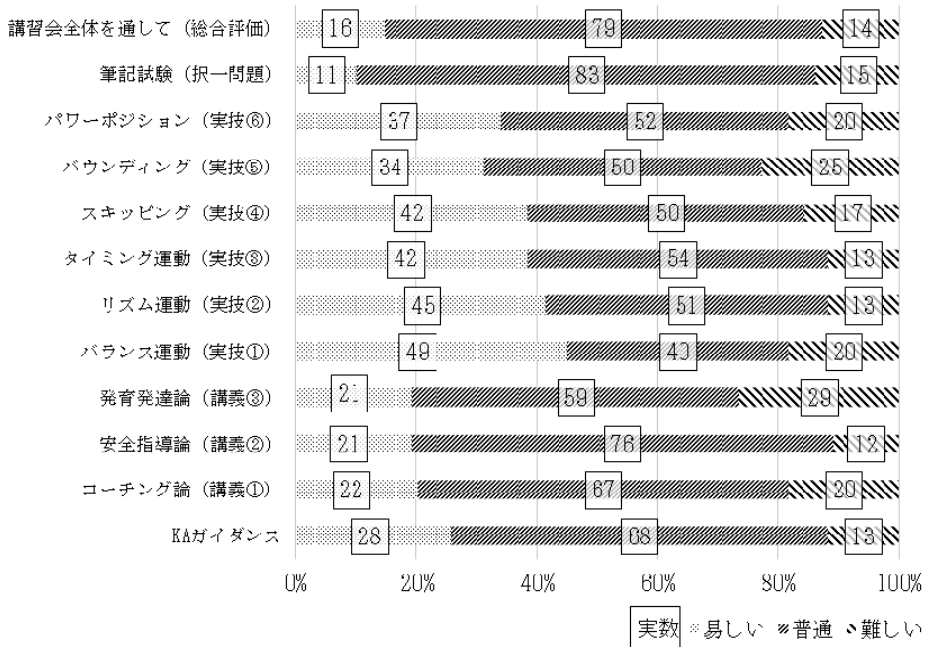


図3. 「内容の難易度」におけるアンケートの集計結果

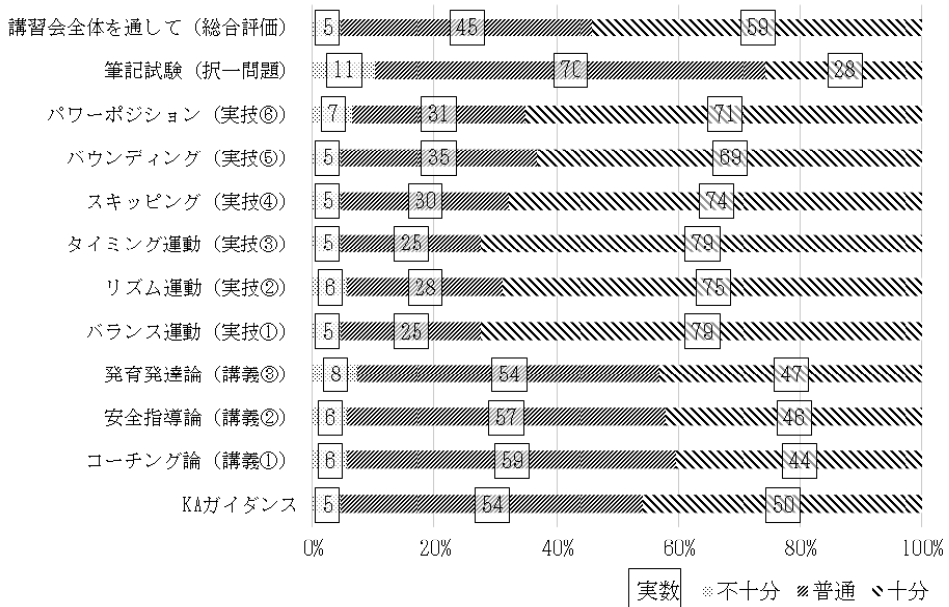


図4. 「自己の理解度」におけるアンケートの集計結果

義プログラムや【筆記試験】では『普通』が多く、『十分』、『不十分』と続いた。

2) 各プログラムにおける「自己の満足度」・「内容の難易度」・「自己の理解度」の二項検定の結果

以下にアンケート評価の項目（主にプログラム名）に【 】を用い、評価の基準には、『 』を用いて説明する。

「自己の満足度」について、『満足』と『それ以外（普通と不満足）』における二項検定の結果を図5に示す。【講習会全体】において、『満足』が $p<0.05$ と有意に高い値を示した。さらにプログラム内容に着目してみると講義プログラムと【KAガイダンス】を除き『満足』が $p<0.05$ と有意に高い割合を示した。

次に「内容の難易度」について、『普通』と『それ以外（易しいと難しい）』における二項検定の結果は図6に示す。【講習会全体】では

『普通』が $p<0.01$ と有意に高い割合であった。そして、プログラム内容について着目してみると、【安全指導】と【筆記試験】においては、『普通』が $p<0.01$ であり、【KAガイダンス】と【コーチング論】においては『普通』が $p<0.05$ と有意に高い値を示した。一方、【バランス運動】においては、『それ以外』が $p<0.01$ と有意に高い値であった。その他のプログラムについては、有意な差は認められなかった。

一方、「自己の理解度」について『十分』と『それ以外（普通と不十分）』における二項検定の結果を図7に示す。【講習会全体】では、有意な差が認められなかった。また、プログラム内容に着目してみると、【KAガイダンス】や講義プログラムにおいて有意な差は認められなかったが実技プログラム及び【筆記試験】において、 $p<0.05$ と『十分』が有意に高い値を示した。

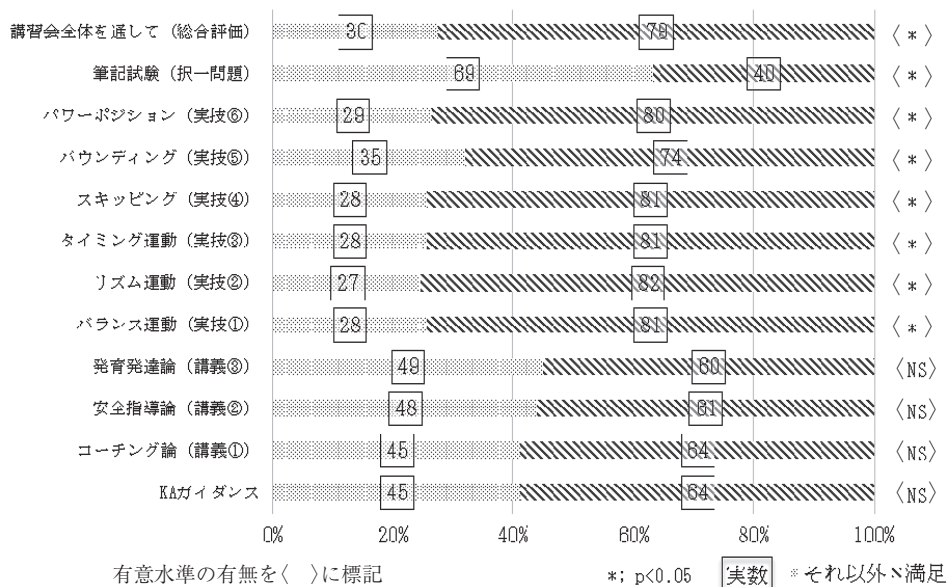


図5. 「自己の満足度」の適性に関する結果

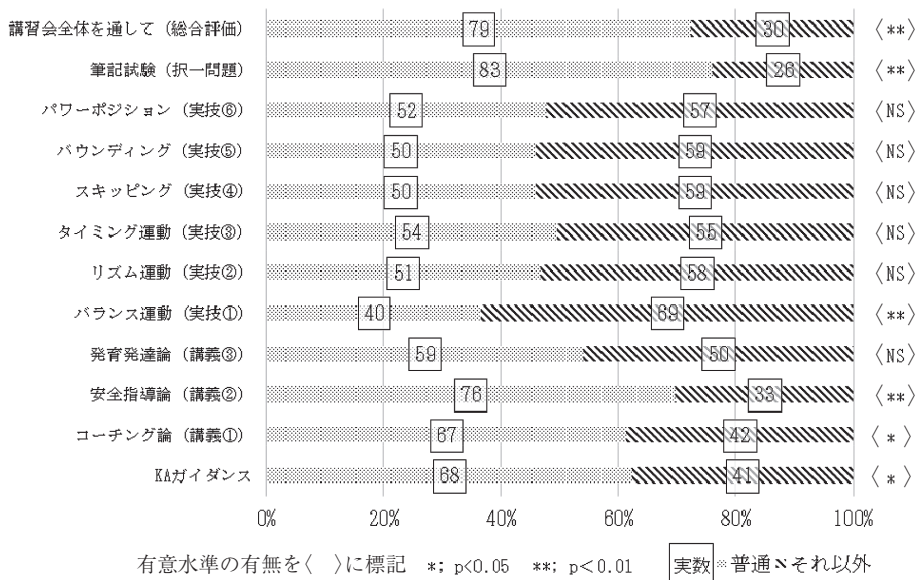


図6. 「内容の難易度」の適性に関する結果

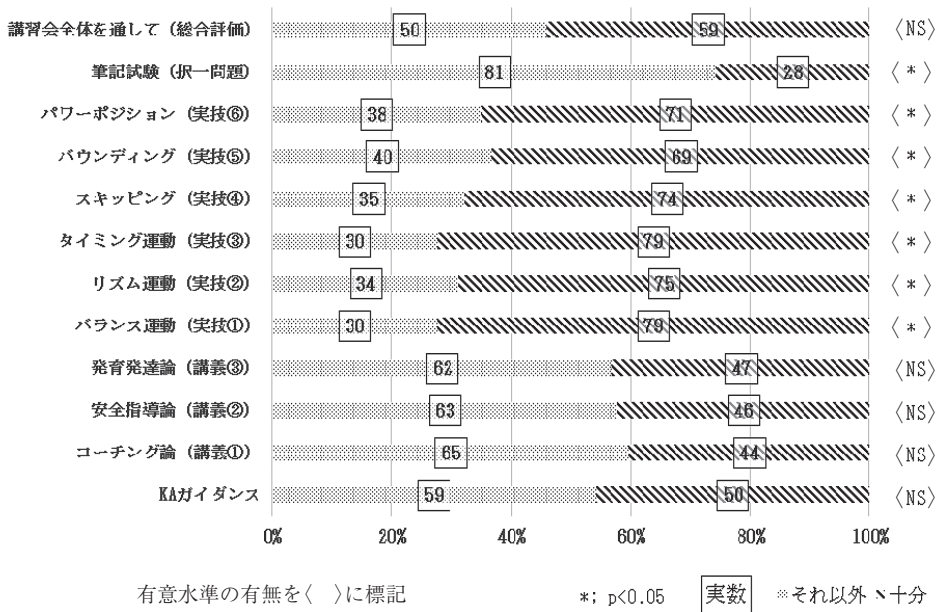


図7. 「自己の理解度」の適性に関する結果

3) 自由記述におけるテキストデータの内容分析結果

講習会の感想を記載したテキストデータを意味単位に分け、類似したデータをまとめ5つのカテゴリとその他に分類した(表3)。以下にカテゴリを『』に、そこに含まれるサブカテゴリに「」を用いて結果を示し説明する。

もっとも多くの意味単位を集めたカテゴリは、『理解の向上』(90個)であった。サブカテゴリとして、「講義と実技の組み合わせ」(42個)、「講義の内容」(17個)、「講師の振る舞い」(14個)、「グループワークによるディスカッション」(9個)、「実技による理解」(7個)、「その他」(1個)に分けられた。

次に『意欲の向上』(70個)が多く集まったカテゴリである。このサブカテゴリとしては、「資格の取得」(25個)、「知識の活用」(23個)、「復習への意欲的」(13個)、「知識習得」(7個)、「その他」(2個)であった。

そして、次に意味単位が多かったカテゴリは、『気づき・発見』(66個)である。サブカテゴリは、「コーチングスキル」(27個)、「方

法」(25個)、「自己の能力」(11個)、「その他」(3個)であった。

さらに次のカテゴリは、『満足感』(47個)であり、サブカテゴリは「満足」(37個)、「自己の成長」(6個)、「達成感」(4個)であった。

その次のカテゴリは、『意見・要望』(24個)だった。サブカテゴリは、「難易度」(9個)、「環境」(6個)、「時間」(5個)、「その他」(5個)であった。

考察

日本キッズアスレティクス協会のインストラクター資格講習会において実施したアンケート調査の結果から、全体的にSI講習会の満足度は高い傾向であった。しかしながら、より講習会の充実を図る為に、『満足』と『それ以外(普通と不満足)』に分けて分析した結果、特に講義プログラムにおいては、「普通」と答えた受講生の多さから有意差が見られず、講義プログラムにおける満足度に関する改善の余地があることが伺えた。

表3. 自由記述におけるテキストデータの内容分析の結果

カテゴリ	意味単位(個)
理解の向上	90
意欲の向上	70
気づき・発見	66
満足感	47
意見要望	24
その他	58

また、講習会の難易度に関しては、普通と感じた受講生が多い傾向であり、取り扱う内容について適正であることが伺えた。その一方で、改善の余地を探る為、これらのデータを『普通』と『それ以外（易しいと難しい）』に分けて検討した結果、【バランス運動】を始めとする実技プログラムで難易度が容易であることが考えられ、改善の余地が示唆された。

そして、講習会の理解度に関して、講習会全体を通して十分と感じている受講生が多い傾向であったが、講義プログラムについて普通と感じている受講生も多かった。より講習会の充実を図る為に、『十分』と『それ以外（普通と不十分）』に分けて分析した結果、実技プログラムにおいては、十分と感じた受講生が多かったが、【KAガイダンス】や講義プログラムにおいては、普通と答えた受講生が多く、講習会全体として有意な差が認められない原因だと考えられた。講義プログラムの理解度について、普通と答えた受講生が多かった理由として、今回の調査対象が大学生であった為、指導経験が浅い、もしくは、無いことが影響し、理解が深まらなかった可能性が推測される。一方、講習会の感想を自由記述で回答させ、質的分析を行った結果では『理解の向上』が多く抽出され中でも、「実技と講義の組み合わせ」や「講義の内容」、「講師の振る舞い」、「グループワークにおけるディスカッション」、「実技による理解」などが挙げられた。このことから、講義プログラムだけでは、指導経験の少なさから、理解度が上がらなかったが、実技プログラムを組み合わせられて講習会が実施されていることや講師の振る舞いによって、受講生の理解向上に繋がっていたことが考えられた。これまでS1講習会については、講義プログラムを実施した上で実技

プログラムを行っていたが、その組み合わせ方について、改善の余地があることが示唆された。

関口（2016）によると、これまでのコーチ資格研修や講習会のプログラムデザインについて①コーチが持つ知識や経験が考慮されない、②コーチングにおけるコンテキストが考慮されない、③知識やスキル獲得を考慮した支援がないことを問題として指摘している。つまり、コーチ資格研修や講習会において、より指導現場における実践に置き換えて得られる深い学びに繋げるプログラムデザインについて考慮した講習会の実現が重要となる。このことを踏まえると、今回得られた結果は、日本キッズアスレティクス協会が行ってきたインストラクター資格講習会は、講義プログラムと実技プログラムの組み合わせがされていることから、受講生による高い評価に繋がったと考えられる。その一方で、講習会の満足度や難易度、受講生の理解度をより高める為に、実技プログラムにおいては、子どもたちへの指導を意識した、より実践的な学びに関連付けること、講義プログラムにおいては、実技プログラムとの関連性を高めることや振り返りを多く取り入れるなど理解度を高めることについての改善の余地があると考えられた。

なお、【筆記試験】の満足度・難易度・理解度については、受講生の筆記試験の出来・不出来が影響している可能性が高いことから考察を控えることとした。

まとめ

日本キッズアスレティクス協会で行われているインストラクター資格講習会の成果について検証することを目的とし、受講者に対して行ったアンケートを分析した。その結果、S1

講習会の満足度・難易度、受講生の理解度について、高い評価を受けていることが伺えた。また、受講生の自由記述による感想をテキストデータで質的分析を行った結果、『理解の向上』、『意欲の向上』、『気づき・発見』、『満足感』、『意見要望』というカテゴリーが得られた。これらのことから、インストラクター資格講習会は、講義プログラムと実技プログラムの組み合わせから、深い学びに繋がっていることが推察された。その一方で、更なる講習会の充実を図るべく、より厳しい視点で講習会の成果について検証を行った。その結果、実技プログラムにおいて、子どもたちへの指導を意識した、より実践的な学びに関連付けることの必要性が伺えた。また、講義プログラムにおいては、実技プログラムとの関連性を高めるため、プログラムの組み合わせ方を考慮することや振り返りの時間を多く取り入れることの必要性が示唆された。

参考文献

- 1) Peter J L Thompson: INTRODUCTION TO COACHING The Official IAAF Guide to Coaching Athletics. International Association of Athletics Federations: Monaco, pp54-55, 2005
- 2) 小林敬和, 繁田進, 沼澤秀雄, ほか.: キッズアスレックス教本 [第3版]. 日本キッズアスレックス協会, 小林敬和編, 東京平版株式会社: 東京, pp1-6, 2016
- 3) 黒岩純, 大平正軌, 亀山巖, ほか.: コーチ教育プログラムの成果に関する一考察—コーチのセルフフレクションに着目して—. 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要. 10. p21-30, 2017
- 4) 永島昇太郎, 泉水朝宏, 小林敬和, ほか.: キッズアスレックス指導者養成講習会の受講生の実態報告. 帝京大学スポーツ医療研究. 8, p31-36, 2016
- 5) 日本キッズアスレックス協会公式ホームページ: <https://www.kidsathletics-japan.org/> (2017年11月30日)
- 6) 関口遵: スポーツコーチの学びとその教育・育成に関する研究. 日本ストレングス&コンディショニング協会機関誌, 2016, 23 (1), 2-9
- 7) 北村勝朗, 齋藤茂, 永山貴洋: 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか?—質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築. スポーツ心理学研究32 (1), p17-28, 2005